

里山の持続可能なくらしの文化・技術調査および 「くわどり生活デザイン参考館」整備事業

特定非営利活動法人 かみえちご山里ファン倶楽部

1. 事業の背景

本事業の対象地域である上越市西部中山間地域「桑取谷」は雪国の民俗文化を背景とした伝統技術・伝統行事の残る自然豊かな地域である。しかし近年、少子高齢化、若者の流出、農業の衰退など複合的な問題により、それらは年々消滅しつつある。平成13年に上越市が行なった「山里伝統技術レッドデータ調査」では、里山の景観を守る生活技術が、平成29年ごろまでにはほとんど消滅してしまうという結果が明らかになった。そこで衰退の一途をたどる中山間地域に新たな価値と息吹を吹き込んでいこうと、地元住民が中心となり、関係NPO、行政、企業などの協力を得て当団体が設立された。市の環境教育施設や森林公園の運営管理を受託するとともに、本来事業である地域の伝統文化や生活技能の伝承保全活動、地域産業の活性化、地域が自らの人材や資源を活かした自治的な福祉や教育事業に取り組んでいる。

産業振興への取り組みとして、これまで地域資源を活用した体験事業や農産品の加工販売、視察研修受け入れ等を模索してきたが、今後更に高齢者や移住者のための収入を得る場となるような、小さく多様な産業の立ち上げを目指している。当事業の中心となるエリアには、温泉施設、森林公園、古民家レストランなどがあり質の高い観光資源になりうるが、谷のつきあたりに位置するため、これまでは観光導線として脆弱な部分があった。

2. 事業の目的と概要

本事業の目的はこの土地の資源を有効に活用しながら地域の集客力を高め、当エリアを滞在型で学習的要素の強い観光拠点にしていくことである。素材のみならず、伝統文化や技術を受け継いできた人々の暮らし自体を「地域資源」として捉え、次世代に誇るべき「自然と人との共存の姿」に注目することも大きな特徴となる。そのために、拠点となる学習的要素を担う「くわどり生活デザイン参考館」の展示や販売の充実をはかる必要がある。

そこで平成28年度は、桑取谷に残る、自然と共にある持続可能なくらしの文化と技術を調査し、次世代に伝える形に残す。またその成果として、学習型観光拠点「くわどり生活デザイン参考館」の企画展示と素材や技術を応用した商品開発を行い、併設の「雑貨屋りっぱこっば」の商品として販売することで、新しい時代の自然と人との共存の形を提案し、産業の振興につなげていきたい。

3. 事業内容

① 地域資源調査と企画展示

- 既存資料の整理と追加調査
- 上記を活用した展示会の実施

当団体ではこれまで、「木挽き・大工・茅葺き」等の森林利用に関する伝統技術の再現と記録、結婚式など冠婚葬祭を自宅で行っていた時代の「膳・碗」の文化についての聞き取りと記録を行ってきた。当事業ではこれらの記録や資料を整理し、追加調査を行うとともに、広く次世代に伝えるツールとして資料の編集を行い、これらを活用した展示会を行なった。

② 地域の資源を活かした販売商品開発

- 調査をもとにした素材開発
- 木製手技品・自然素材利用の商品開発

調査をもとにした素材開発や技術を応用した木製手技品を中心とした自然素材利用の商品開発を行い、店舗販売を行うとともに、インターネット販売も同時に展開し地域の自然や文化的背景に触れる入り口として発信した。また販売動向を受け、地元での生産体制を検討した。

4. 実施報告

■桑取谷の茅葺き文化展 4～5月開催

調査内容

- 桑取谷の茅葺きに使用される道具・素材
- 茅葺きの手順についての調査と映像資料編集
- 地域に唯一残る茅葺き職人によるミニチュア茅葺きの再現と展示物の作成

調査を通して、茅葺き技術の手順をまとめ、再現することで、一般に広く伝える形にすることができた。また、道具についての詳細、カヤ（スキ）、オガラ（大麻の茎）、ワラ、竹、杉など里山の暮らしに根ざした植物の利用と、計画的な材料収集のための管理などについても知る事ができた。



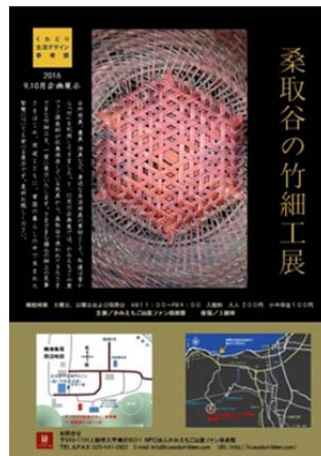
屋根屋の道具 — つち — 茅を葺き、対り込んだ面を揃える為の道具。入手しやすく、軽い杉を使い、職人が自らで揃える。	屋根屋の道具 — 金針 — 茅葺きの針取りに使う。職人が殿治屋に特注で作らせる。針の先端に穴が空いており、その穴に番線を通して針取りを行った。
屋根屋の道具 — とい棒 — 茅葺きの際に、茅が落ちないように押さえるための道具。雑木を加工して、職人が自ら揃える。	屋根屋の道具 — 葺きばさみ — 対り込みの際に使用するはさみ。一般の対りばさみと異なり、刃を反らせるため、製造には殿治屋の高い技術が求められる。

■桑取谷の桶展・竹細工展 7～10月開催

調査内容

一 桶・竹細工を始めとした様々な民具の収集と聞き取り調査

古民家の取り壊しや建て替えなどにより保管場所がなくなった民具は、捨てられたり、燃やされたりしてしまう。これら民具とともに失われる記憶や技術の保存は、高齢化率の高い地域では急務である。この度の調査と展示会の実施により、その利用方法や暮らしの文化的背景などを少しでも明らかにできたことは大きな成果である。今後も、これらをいかに多く残していけるかが、文化伝承の鍵となる。



竹細工の製作

12月から4月までは雪に覆われる桑取谷では、竹細工は、冬仕事で行った。細工は二月の末までの雪の降る寒い頃にやった。三月になるとそろそろ焚きもん山に出たすけ。昔は灯油みたいな燃料はなかったから焚きもん山って言って、一年中燃やす焚き物を山へ行って伐ってくるんだ。今どこにもニオ場って煮くあったが、一番下にボエ(焚き付け)を敷いた上に割木を置いて、またボエを重ねて割木を置いて山に上げていく。それに今度は茅をかけて、一年中しまっておく。秋に合ったってニオがたくさん出来ていた。

■桑取谷の膳・椀文化展 11～12月開催

調査内容

- 一 桑取谷の膳・椀の収集と用途
- 一 膳・椀を使用する行事や生活の風習

古くは江戸時代から伝わる膳・椀を整理し、名称や利用法などを調査することにより、昔ながらの婚礼の料理や宴席の進行など、貴重な文化の詳細をまとめ、次世代に伝える形ができた。また連綿と受け継がれてきた「ハレ」と「ケ」の文化、「結」などに関わる行事についても、道具を通じて学ぶことができた。



■地域の資源を活かした販売商品開発

調査内容

- 伝統的に使われてきた道具のデザイン
- 里山で身近に手に入る素材について

ナタのデザイン

刀身・柄について調査し、地元の素材で安定的に製作できる柄、ならびに鞘について試作を行い、商品紹介のチラシを作成した。

所持者	全長 Mm	柄長さ Mm	柄直径 mm	刃渡り mm	刃巾 mm	突起 長さ mm	柄と刃 の角度	峰厚さ mm	重心口 金より mm	重さ グラム 1号=0.75g	柄樹種
① A	445	195	口金 32 末端 75	峰 250 刃 210	元 42 先 75	90	20	5	50	688 183g	クリ
② B	370	140	口金 40 末端 60	峰 230 刃 205	元 40 先 65	87	10	5	55	612	ネムノキ
③ C	350	140	口金 35 末端 60	峰 210 刃 195	元 40 先 60	80	30	5	55	633	ネムノキ
④ D	345	160	口金 30 末端 40	峰 220 刃 185	元 40 先 64	84	10	5	55	536 143g	イタヤカエデ
⑤ E	410	140	口金 35 末端 55	峰 270 刃 230	元 40 先 50	80	20	5	65	595 158g	タモ
⑥ F	360	140	口金 25 末端 46	峰 220 刃 190	元 40 先 50	80	10	5	60	500 133g	カシ

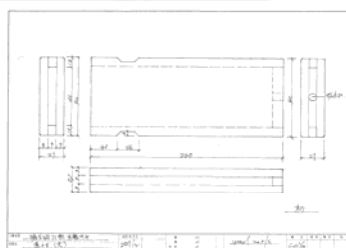
【柄について】

地元で使われているナタの柄にはネムノキ、クリ、イタヤカエデ、カシ、タモなど硬く粘りのあるものが使われており、周囲で入手が容易な材で作られていた。形状は、末端部分を太くするのが特徴であり、長時間の使用で握力が落ちてもしっかり振り下ろし時の抜け落ちを防ぐことのできる形状になっている。



【鞘について】

竹や山ブドウ、フジヅルなどで編まれたものが多く、杉のケース型をしているものもあった。いずれも、使用者が自分のナタに合わせて編んだり加工したりしたものである。現在の市販品は刀身ともに形状が決まっているため、当地において現在も現役で使われている突起付きのナタなどに合うものは独自に制作する必要がある。



調査内容

- 里山の保全と持続可能な利用を促す商品の開発



【素材——「杉」 について】

里山には、戦後の拡大造林により植林され、主伐期を迎えている杉人工林が多く存在する。しかし、木材価格の下落により伐採利用はおろか、管理放棄されることで荒廃した森林が地すべりを起こす要因の一つともなっている。また危険木や支障木として伐採されたとしても、薪やチップなどに使われるしかない現状がある。そこで、50～60年生の大径木の特徴を活かし新たな価値付けができる商品開発を行うことで、山間地域の森林荒廃を食い止め、資源の有効活用をする機会としたい。

大型で柔らかい杉でかつ深い形のろくろ挽きは大変高度な技術を要する。「上越マイスター」の認定を受けた、地元職人による手技品によりワインクーラーを試作した。また前述のナタの鞘も安定的に手に入る杉を利用し試作を行なった。



【素材——「雑木」について】

日本の雑木林は、かつては炭焼きや燃料として盛んに伐採されることで、手入れや管理が行われてきた。しかし近年は石油燃料の普及により炭焼きが衰退すると、更新されない雑木林の植生は貧しくなり、それに伴い日本の里山特有の生態系の豊かさが失われつつある。

雑木を利用した商品の開発により、定期的に森に入ることにつながってきた自然と人の暮らしとの関わりを見直すきっかけとなることを目指した。具体的には「クルミ」「カキ」「サクラ」「ヤチダモ」など地域で身近な雑木を使用した雑貨の試作を行なった。



【素材——「ワラ」について】

中山間地域の稲作においては、棚田による稲作が主となり、生産性は望めない。しかし一方で、水土保持や、稲作に関わるあらゆる伝統技能を保存するための「箱舟」としての機能は大変重要なものであり、大規模農業にはない役割を担っている。また、副産物のワラを利用したワラ細工についても、自然と人との共存の象徴と言える貴重な技術であるが、技術者、材料ともに減少の一途をたどり、存在の危機に瀕している。材料であるワラについては、稲作の大規模化によりコンバインによる稲刈りが行われるようになった昨今、希少価値は高まる一方である。生活スタイルの変化とともに利用されなくなり、途絶えかけているこの技術の保全と同時に、素材としてのワラの価値を更に高めるための商品の開発を行なった。

これらわら細工については、素材や形状の工夫を行っての試作と、手順書の作成・伝統技術を次世代に伝える技術伝承会を数回にわたり実施した。



■オンラインストアの開設と試験的販売

オンラインストアを開設し、試作品の試験的販売を行なったことにより、「ナタ」や「ワラゾウリ」については一定の需要があることがわかった。今後、価格帯や品質、現代の生活スタイルに合ったデザインなどの研究を続け、定番の商品にする予定。また、フカグツについては、長靴の中に入れて使用できる形状を開発。実用新案登録申請中である。こちらは生活の中での利用というよりも衣装の一部としての利用を提案していく。オーナメントやキーホルダーなど価格帯の低いものや小さいものは店頭販売向きであり、ワインクーラーは今後飲食店へ持ち込み、使い心地や機能、デザイン性などを更に洗練させていく予定である。

オンラインストアでは、今後地域の文化や自然環境に触れる窓口としての機能を充実させていく。



4. 成果と今後の展望

本事業を通して、地域文化の掘り起こしと、それを資源として地域に人を呼び込むためのツールを作る雛形ができた。今後も里山だからこそ伝えられる持続可能なくらしの文化や技術を少しでも多くの人に伝えることで、地域のファンや理解者を増やし、UJI ターンの促進にもつなげていく。

また、このような地域にとって重要なのは、「素材、文化、技術、人」など、地域の資源を活かした多様な商品を扱うことで、一製品に寄りかかるような一極型の大きな産業ではなく、手仕事を通して地域の高齢者や農業者、移住者等が関わりながら副収入を得られるような小さな規模の産業を数多く発生させることである。このたびの商品開発により、この「小さな産業」の具体的な第一歩を踏み出すことができた。今後更に研究を重ね、里山を守る人々の暮らしの一助となると同時に、技術伝承や森林保全、水土保全に寄与することのできる産業の形を整えていきたい。

更に今後は、これらの資源を活かし、従来の田舎イメージ消費型の観光ではない、学習型の観光資源の開発による交流人口の増加と経済効果の増大を目指していく。既存の施設それぞれのキャパシティは大きくはないが、これらを複合し地域全体を滞在型のエリアとして捉えることで、地域に多くの人を呼びこむことができる要素となる。そのためにも、それぞれの資源の質を上げる取り組みを今後も続けていく。